# 童

2012　4.27

タンポポやオオイヌノフグリの咲きほころぶ緑の絨毯の上で、鯉のぼりが舞い踊る大地の春の光景が広がっています。子どもたちの、鯉のぼりの中に入って遊ぶ姿は、大地の春の風物詩となりました。

4 月、新学期の子どもたちの集う園などでは子どもたちの泣き叫ぶ声が響き渡り、先生たちも大声の毎日で声をからし、てんやわんやの日々が続くことがありますが、大地では、「3 学期の子どもたちと変わらない」というほど、落ち着いて、毎日を楽しんでいます。これは奇跡としか言いようのないすごいことです。朝の会、わらべ歌、絵本、お弁当など、全てが落ち着いて集中力抜群。スタッフも当てが外れたといった感じで、子どもたちの日々の姿に驚いています。年少児が半分以上を占めているのに、この落着きは何だという感じで、うれしい楽しい毎日を過ごしています。

風薫る 5 月を控えて、躍動感あふれる毎日を、大地に集う家族が大地で過ごしていっていただければ嬉しい限りです。連休中も、リズムのある生活をベースに、思い切り子どもたちと、今を楽しんでください。連休明けから、本格的に、大地のリズムある生活が始まります。

## 【子ども部屋】

この春、娘と次男が家を離れて、それぞれの道へ旅立ちました。長男は、完全に親から独立して、自分の世界を満喫しています。子どもたちは、それぞれ、長年住み慣れた自分達の部屋を片付け、自分の身の始末はきちんとつけて、旅立っていきました。家を離れる前夜まで、部屋はそのままだったのに、朝になると、見事に部屋は片付き、きちんとけじめがつけてあります。次男の旅立ちの朝は、5 時前だったのに、きちんと布団がたたまれていたのには、驚きました。ある意味では、さすがだと思いましたが、それ以上に、寂しさと喪失感がありました。
昔は、子ども部屋なんてなくて、それぞれ大家族で暮らしていた時は、こんな喪失感などなかったのだろうと思います。

先日、妻と、我が家は、子どもが独立すると、その部屋を次の子どもが使ったり（日当たりのよい部屋など)、部屋を整理したりするから、子どもたちは、自分の帰る場所がなくなり、帰ってきにくくなるかもしれない、いつ帰ってきてもいいように、そのままにしておくことも必要かも、などと話しました。今まで、実際、帰ってきたときは、残っている子どもの部屋に、長男や娘も乱入して、布団を持ち込み、一緒に寝ていますが。大晦日に長男が帰ってきたときは、娘の部屋に全員が入って眠り、先日、一週間前、長男が帰ってきたときは、末っ子の部屋に入り、一緒に寝ていました。そして、朝一緒に新聞配達に行き、野球の送迎をし、風呂を一緒に入り、寝食を共にしていました。

とにかく、小さいころから、我が家の 4 人の子どもたちは仲がよく、今でも変わらず、何でも相談しあい、話をしています。長男と長女は、中でも際立っており、そして、娘は、「ブラコン」と自他とも認め、弟 2 人を、恋人のように可愛がっています。弟たちに彼女ができた時は、すごい嫉妬で、彼女に電話をしてまで、ああだこうだと言う始末です。

なぜ、こんなに仲が良いのだろう　と考えました。思い当たることは、家族が共に過ごす時間を大切にしよう、ご飯だけは一緒に家で食べよう、子どもと夕食を一緒に食べるために、小学生までは、塾や習い事をさせずに、毎晩、一緒に過ごそう、中学生になれば、部活などが優先され、毎晩、当たり前のように、同じ屋根の下で暮らす日常はなくなってしまうから　と思ったからです。その意味で、長男は、塾も何の習い事（野球は、土曜日の午前中だけで、出るのも休むのも自由で、親も子供も、そんなに熱が入っていなかった）もせずに、毎晩、完全に、家族でご飯を食べて過ごしていました。予想通り、長男が中学に入ると、野球が始まり、長い間続いた、当たり前の日常が崩れました。

長女、次男にも、同様、夕ご飯や土日に差し支えるような習い事もさせずに、子どもと過ごす家族のひと時を、日常的にしようとしてきましたが、末っ子が大きくなるころには、上の 3 人は、それぞれ部活が忙しくなり、家族のひと時がほとんどなくなったので、末っ子だけは、小学生から、大好きな野球をやらせてもらえました。
家族が家族として、子どもたちと　日常、当たり前として寝食を共にし、同じ屋根の下でたわいもない会話をしながらの暮らしは、人生の中で、今思えばわずかな期間です。それだけに、私たち夫婦は、なるべく、塾や習い事をさせずに、日常の一緒に過ごす時間を大切にしてきて、その延長線上にも、テレビなどに、家族の時間、世界を奪われたくなかったという思いもありました。

でも、子どもたちが仲がいいのは、実際、このことばかりではないでしょう。きっと、共通の被害者意識、同じ苦労をした仲間、部活のような同じ釜の飯を食べ、寝食を共にした意識があるからでしょう。頑固なちょっと変わったおやじに、理不尽に育てられた共通の苦労した意識、思い出があるからかもしれません。だから、会えば、小さいころのああだった、こうだった　という話で盛り上がっています。これが 1 番かもしれません。

昨年の大みそかに、長男が帰国して、ゆっくり、話を聞けないままに、文庫の一大事があり、そのまま、復興に向けて突き進み、長男は、1 月の末には京都へ出稼ぎ兼トレーニングに行ってしまい、先日、ようやく、落ち着いて、話を聞ける時間がありました。久しぶりに向き合うので、あれもしてあげたい、こんな所へ連れて行ってあげたい　と思いましたが、本人は、家がいい、家のお風呂がいい、弟と過ごすのがいい、お母さんのご飯がいい、買い物に行っても、牛乳でいい　とか、服装や物にも興味がなく、無欲の人間になっていて、驚きました。もちろん、携帯やメールやテレビも全く興味なく、エベレスト登山準備に向けて、朝から 20 キロを超える荷物を背負い、登山靴を履いて、末っ子と一緒に新聞配達へ行き、帰ってくると、そのまま、大地のスロープを登り下りして、その後、筋トレ。手は、ロッククライミングのトレーニングで豆だらけ。上半身の筋肉も発達して、こいつ、本気でエベレストを目指しているのだという、気迫と自律とその意気込み、本気モードの人生を確信しました。そして、現在、ネパールに入り、2 年後のエベレスト登頂をめざし、現地調査に行っています。

2、3 日前、妻が話していました。子どもたちのために、自分のことを優先しないで、子どもたちをいつも優先してきたけれど、2 回だけ、できなかったことがある。一つは、娘の中学の時の最後のｱﾝｻﾝﾌﾞﾙｺﾝｻｰﾄ　ともう一つは、次男と末っ子の小学生の時の 1 回だけの音楽会。どちらもお話の発表会と重なったこと。子どもにしてみれば、親が見に来ているかどうかは、さほど気にならない年齢での行事かもしれませんが、妻にしてみれば、子どもにまなざしを向けたかったに違いありません。4 人の子どもたちの行事やこんな機会は山ほどあったのに、一つ一つをこんなに大切に、思っていたのだなと思うと、妻の素晴らしさ、慈愛に感動しました。きっと、こんな思いは、子どもたちに伝わって、その中で、子どもたちは、大きくなり、今があるのだろうと思いました。
まさに、妻の語る、エチオピアの昔話「山の上の火」そのものです。